

ベルリン市州における地域スポーツクラブの活動

— 小規模クラブならびに障害者の活動に焦点を当てて —

山本 理人・安井 友康\*・越川 茂樹\*\*

北海道教育大学岩見沢校保健体育研究室

\*北海道教育大学岩見沢校福祉教育研究室

\*\*岡山県立大学地域スポーツシステム学研究室

Practice of the Sports Club in Berlin

— Assign a Focus to Small Sports Club and the Activity of the Person with Disability —

YAMAMOTO Rihito, YASUI Tomoyasu\* and KOSHIKAWA Shigeki\*\*

Department of Physical Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

\*Department of Social Welfare Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

\*\*Department of Community Sport System, Okayama Prefectural University

北海道教育大学紀要（教育科学編）

第 59 卷 第 2 号 別 刷

平成 21 年 2 月

## ベルリン市州における地域スポーツクラブの活動

— 小規模クラブならびに障害者の活動に焦点を当てて —

山本 理人・安井 友康\*・越川 茂樹\*\*

北海道教育大学岩見沢校保健体育研究室

\*北海道教育大学岩見沢校福祉教育研究室

\*\*岡山県立大学地域スポーツシステム学研究室

## Practice of the Sports Club in Berlin

— Assign a Focus to Small Sports Club and the Activity of the Person with Disability —

YAMAMOTO Rihito, YASUI Tomoyasu\* and KOSHIKAWA Shigeki\*\*

Department of Physical Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

\*Department of Social Welfare Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

\*\*Department of Community Sport System, Okayama Prefectural University

### 概 要

本調査では、ドイツにおける比較的小規模な地域スポーツクラブの活動ならびに障害のある人々の地域スポーツクラブにおける活動の実態を記述するために、ベルリン市州の4つのクラブを訪問しインタビュー調査を行った。小規模クラブでは、活動場所が限られている（小学校のグラウンドを利用、クラブハウスがない）、新入会員が少ないなどの課題を抱えていたが、多世代にまたがるメンバーが交流をしながら活動を行っていた。また、障害のある人々も障害のない人々とともに、多世代が関わりを持ちながら活動を行っていた。今後は、わが国のスポーツ環境を改善するために、大都市ではない（比較的人口規模の小さい）地域の実態や、移民など社会的に弱い立場の人たちのスポーツ活動の実態を調査することが求められる。

### I はじめに

近年、わが国のスポーツ環境は大きな転換期を迎えている。これまで学校や企業を中心として展開されてきた多くのスポーツ活動は、少子化や経済の低迷といった大きな流れを背景としながら、その制度的な限界を露呈しつつある。学校運動部を中心として展開されてきた青少年のスポーツ活動は、少子化による参加生徒の減少だけでなく、スポーツ種目における格差（メディアに多く露出する種目のみが隆盛）、指導者の不

足といった多くの問題を抱えており、子どもたちが自分たちの生活地域で安定してスポーツ活動を行うことが困難になってきている。また、これまでトップアスリートを支援してきた企業スポーツも母体となる企業業績の悪化などから、その仕組み自体が壊れつつある。

このような中で、地域におけるスポーツ環境を改善するための新たな取り組みも進められている。文部科学省（旧文部省）が2000年に示した「スポーツ振興基本計画」のなかにも「総合型地域スポーツクラブ」という言葉が明記され、多種目、多世代、多志向（レクリエーションな活動から競技志向の活動まで）の地域スポーツクラブが新たな活動拠点として注目されている。また、このような総合型地域スポーツクラブのモデルとして、ヨーロッパ、とりわけドイツのスポーツクラブが注目され、先進事例として数多く紹介されてきている。

しかしながら、これまで紹介されてきたドイツのスポーツクラブは、100年以上の歴史を持ち、クラブハウスやプロチームを有するようなクラブが多く、クラブ創生期のわが国にとっては「羨望的」であるがリアリティのあるモデルとは言えないケースが多い。また、近年ドイツでは、移民の流入による経済格差、学力格差の増大という社会的な課題が顕在化し、スポーツクラブも財政破綻や若年層の離脱といった問題を抱えている。ドイツにおけるスポーツクラブの現実を記述することは、同じような社会的背景（少子化、経済格差など）を持つわが国のスポーツ環境の整備において重要な意味がある。

本報告は、ベルリン市州で展開されている比較的小規模な地域スポーツクラブと障害のある人々の地域スポーツクラブにおける活動の実態を、インタビュー調査などから記述することで、今後のわが国における地域のスポーツ環境を改善するための基礎的な資料を提供しようとするものである。

## II ドイツのスポーツ環境

### 1. ドイツにおけるスポーツクラブの現状

ドイツは、さまざまなジャンルのスポーツクラブが存在し、一つのクラブだけでなく複数のクラブのメンバーである成人が多く存在するような状況から「クラブの国」と称されている（Heinemann, 1999, 143, 藤井2003, 202）。また、国民のおよそ3人に一人が何らかのスポーツクラブ<sup>(注1)</sup>に所属している（Grupe, O., Krüger, M. 1999, 159）といわれており、スポーツクラブの社会的組織としての影響力は軽視できない。現在ドイツでは、90,000を超えるクラブによって競技スポーツ、レジャースポーツ、健康スポーツの領域が担われている。こうした量的な側面のみならず質的な側面に目を向けると、NPOとしてのスポーツクラブは公益的なスポーツの提供をめざしている。具体的には、①フェアプレイや寛容さといった価値を伝えること、②安価にスポーツをする場を提供すること<sup>(注2)</sup>、③青少年の健全育成事業に特に責任を負うこと、④共同性や連帯性に重きをおくこと（Breuer, C., Haase, A. 2007, 314）が、スポーツクラブのめざす重要な目標とされている。仮にスポーツクラブがなかったら、住民に対する適切なスポーツの保障は考えられない（Breuer, C., Haase, A. 2007, 314）という認識から、ドイツのスポーツクラブには、公益性に対する役割を担い、それゆえ公益性に向けて責任ある行動を取ることが望まれているといえる。

クラブにおけるスポーツが公益性をその特徴としているということは、上述のクラブの目標からも明らかのように、個人に対して楽しさや喜び以上のものを提供するということであり、単に個人の利益や好みのみ沿うものであってはならない（Grupe, O., Krüger, M. 1999, 160）ということである。また、スポーツ的な課題を越えて、教育的、社会的、文化的な課題を引き受けることが求められているということである。さらに、クラブが公益性を有しているということは、会員数やクラブにスタッフとして関わる人数だけではなく、他の公益団体との協調や社会的な催しと提供があることなどからも理解されている。

さて、今日スポーツクラブでは従来のようにスポーツを提供することに甘んじているのではなく、健康の維持・増進に貢献するというを特に強く意識したプログラムの提供に心がけている。Heinemann (1999) は、ドイツにおけるスポーツは、今日、供給市場から需要市場へと変化し、顧客志向のマーケットとなっていることを受けて、クラブも伝統的に堅持しているもの以上に新しいスポーツ文化を開拓することに対してより敏感で柔軟に反応しなければならないと指摘する。先に述べた健康志向の傾向にあるスポーツクラブの動向は、現代の高度消費・情報社会やサービス化社会と称される時代背景に応じて変容する人々のスポーツ観とライフスタイルや価値観の影響を多分に受けていると考えられる。

スポーツクラブの動向を把握する上で、そこで生じている問題について認識することも重要である。スポーツクラブの抱える一般的な問題としては、ボランティアとして働くスタッフや競技スポーツに携わる青少年の減少、会員のつなぎとめ、クラブの財政状態、スポーツ施設の利用時間、利用するスポーツ施設の状態が指摘されている。(Breuer, C., Haase, A. 2007, 322-323) とりわけ、ボランティアとして働くスタッフや競技スポーツに携わる青少年の減少、会員のつなぎとめ、もしくは獲得といった問題については、商業スポーツ施設によるスポーツ提供や個人的なスポーツ活動の機会の増加に関連した、「商業的に提供されるスポーツ種目を個人(消費者)として行う傾向の増加」や「特定のスポーツ種目ではなく、いろいろなスポーツ種目を同時にこなしたり、時期や年代ごとにスポーツ科目を変更する従事の仕方の増加」がある(Grupe, O., 2000, 66-67) と考えられる。それには、クラブ加入やスポーツ参加の規定が、組織的にも参加条件においても軽減され、クラブ間の障壁がより低くなり、クラブにおいて組織されたスポーツ種目とそれとは無関係にあった科目との間にあった境界が強固でなくなったことや、ほとんどの種目が年齢、性、階層のカテゴリーを拡張してきた(Grupe, O., 2000, 67) というクラブの体制の変化が影響しているようである。こうした量的拡大が起因しているのみならず、質にかかわる人々のスポーツをする動機とスポーツへの期待や要求も、クラブをめぐる問題に関係していると考えられる。すなわち、これまでの伝統的なスポーツ観に由来する、達成することへのこだわり、練習の喜び、競争への参加、仲間意識などに支えられたスポーツ活動以上に、娯楽、身体体験、美容、健康や安寧、娯楽などを求めてスポーツ活動をする傾向が強まっている(Grupe, O., 2000, 68-69) ことが、伝統的なクラブのあり方に影響を及ぼし、クラブとしての活動の敬遠、もしくはクラブ離れを生じさせていると考えられる。

公益的なクラブスポーツの社会的、教育的意味は、個人の欲求と能力に応じたスポーツ活動の場の提供(形態や内容)の保障であり、そうした立場から、スポーツクラブは、クラブという自由意志による共同体のなかで、「生涯にわたるスポーツの享受」に向けた組織レベルでの支えとなることが責務であると理解されている。しかしながら、この点が現在問題を生み出す要因ともなっている。つまり、クラブは、個人の欲求や能力に応じようと、上述のような人々のスポーツをする動機とスポーツへの期待や要求が、競技的で達成と結びついたものから、娯楽やレジャーと結びついたものまでを保障しようとする。また、会員は消費者としてクラブにおける活動を望み、振る舞う。仮に、それがかなわなければ、クラブを離れてしまうこともある。実際に、クラブの中でのいろいろな縛りがわずらわしいために会員がクラブから離れるという問題もあるようである。<sup>(注3)</sup>クラブは、本来民主的な考え方や立場を特徴としているが、そのことが現在クラブの発展のジレンマになっているのである。つまり、誰もが自由に入出入りできる開かれた組織がクラブであり、そのことがクラブの拡大を支えているが、クラブが拡大していくとともに、会員のニーズに応えようとするクラブにおいて民主的な質が弱体化している(Diegel, H., 2004) という現実がある。<sup>(注4)</sup>

## 2. クラブにおける青少年スポーツ

ドイツにおいて、スポーツクラブは依然として青少年がスポーツ活動をする上で学校と並んで中心的な拠

点であり、従って重要な役割を担っている。<sup>(注5)</sup>多くのクラブは、子どもや青少年に対してスポーツを提供するとともに、スポーツを越えた一般的な青少年活動にも携わっている。(Grupe, O., Krüger, M. 1999, 165) それは、多くのスポーツ組織の目標である「人格形成」「健康教育」「レジャー教育」そして「政治的な教育」(Baur, J. 1991)と関係している。<sup>(注6)</sup>

ドイツ全体のスポーツクラブの91%は、子どもや青少年を会員としており、その中で子どもと青少年の占める割合は平均すると29%である。スポーツクラブに対する子どもや青少年の意味は、青少年健全育成事業における責任が57.4%、青少年の非行防止を課題としているが40.1%となっている。ちなみに競技スポーツにおける才能促進への責務は15.1%にすぎない。(Breuer, C., 2007, 286)

スポーツクラブの中で、特に子どもや青少年のスポーツ活動を志向しているクラブは、そうではないクラブに比べて問題を抱えており、それゆえ多くの支援活動を必要としている。それは州ごとにその中身は異なっているものの、全体として次のような傾向が見られる。(Breuer, C., 2007, 286-287) 第一に、青少年の非行防止を課題としているクラブは、それ以外のクラブより問題を有しており、そのため、こうしたクラブ自身が抱えている課題や州にとって解決されることが望ましい課題を克服するための支援活動に特に力を入れている。具体的には商業スポーツ施設との会員獲得競争という問題や決まりや命令、規制の数が多いという問題などがあり、官僚主義の解体といった課題がある。第二に競技スポーツを志向し才能の促進を旨としているクラブに関しては、子どもや青少年領域における才能促進の責務を効果的に進めるために州スポーツ連盟によって支援活動を強化する必要があると考えられているようである。

さらに、子どもや青少年のクラブにおけるスポーツ活動に関して、次のような問題も指摘されている。多くの州におけるスポーツクラブは、人口統計的な変化として出生数の低下と人口構造の変化(高齢化など)を問題にしているが、子どもや青少年のスポーツ活動を志向しているクラブではこの点についてほとんど問題になっていないというデータが示されている。(Breuer, C., 2007, 308) むしろ、少子化にも関わらず、子どもや青少年の参加率は増加している。(http://www.dosb.de) しかしながら、今後少子高齢化といった人口構造の変化にともなう対策がとられなければならないという認識とそれに基づく具体策の検討が行われている。また、藤井(2003b, 208)は、この年代におけるスポーツ活動をめぐって「スポーツクラブの社会的選別的な性格」と「スポーツクラブ・種目の頻繁な変更」という問題をあげている。前者については、「女子と男子、卒業後すぐに労働に従事することが一般的である基幹学校の生徒と、大学への進学準備を目的とするギムナジウムの生徒、社会的階層の低い家庭の青少年と社会的階層の高い家庭の青少年、これらの比較においてはすべて前者のクラブ加入率が低くなっている」(藤井, 2003b, 207)という。後者については、青少年のライフスタイルに脱近代的な価値観が浸透するにしたがい継続的なトレーニング参加への義務・責任意識やスポーツクラブやチームへの帰属感をあまり感じる事のない、いわゆる『気の向くままの』スポーツクラブ生活が進展してきたことや、出生率の低下に由来する少子化がスポーツ種目間そしてスポーツクラブ間の青少年会員の獲得競争を激化させ、青少年のクラブスポーツ開始年齢を早期化させたが、経験の少ない青少年に適切な指導を行える指導者の数が不足していることと早期からの硬直した競技会システムへの参加によって青少年の多様な体験が阻害されていることが理由となっている(藤井, 2003b, 208)と考えられる。いずれにせよ青少年期は、不安的な精神的社会的な状態を経験するということが背景にあると考えられる。つまり、この時期はほかの年齢期以上に今後の人生の進路、例えば職業選択、交友関係などを含めた見通しが不透明な状況に身をおくことになる。そうした状況は、長い就学期間が本来の青年期が成人の年齢にまで拡張されることを後押しし、自立していないという感情を与え、他方で青少年に対して自立と自己責任を要求する。それゆえ、学校や職業教育において求められるものが非常に高いため、スポーツに割く時間がなくなってしまう(Grupe, O., Krüger, M., 1999, 166)と考えられる。

### 3. クラブスポーツと学校スポーツの連携

クラブスポーツと学校スポーツは、それぞれの目標と役割があり、それぞれの置かれている状況や条件の下で機能していたため、その結びつきが密接であったとはいえない。しかしながら、今日クラブと学校が互いに抱えている問題の解決に向けて、両者が結びつくことの必要性が共通に理解され、その関係を強化し、協働することが求められている。この点について、学校スポーツの側において政策レベルで指摘したのは、1985年に公示された『第二次学校スポーツ行動計画』であろう。その「パートナーとしての学校とクラブ」という項の中で、両者の関係の強化と具体的な取り組みに関して提言がなされている。そこでは、競技スポーツという立場からの連携についてはその方策が明確に認められるが、「みんなのスポーツ」という視点からは、ほとんど注視されていない現状が指摘されている。そして「みんなのスポーツ」という立場からの提言として、スポーツクラブにおける技能の低い生徒の集中的な指導、就職後のクラブ離れを防ぐこと（特に女子生徒に関して）、外国人や障害児の問題といった山積する生徒の問題を減らすようなスポーツによる適切な支援の展開、平均的な能力の生徒たちのスポーツ共同体の組織化などが示されている。こうした理念によって学校とスポーツクラブの連携に関する方向づけがなされている。

現在、スポーツクラブと学校との協調については、スポーツクラブのおよそ三分之一が行っており、四分の一が学校と共同のプログラム提供をしている。ドイツ全体ではおよそ23,000の学校とスポーツクラブが連携、もしくは学校に対するスポーツプログラムの提供を行っている。(Breuer, C., Haase, A. 2007, 318) 具体的な内容は、競技スポーツに従事する生徒から一般の生徒を対象にしたものまでさまざまであるが、州ごと、クラブや学校ごとにその規模や充実度について多様でありはっきりとしたデータが示されていないようである。

競技スポーツという枠組みでは、タレント発掘と育成のためのスポーツクラブと学校の連携が主な形である。例えば、校内スポーツクラブにクラブのコーチが派遣され、競技スポーツに従事している生徒のトレーニングを行ったり、彼らを対象として寄宿舎制度を設けたりという取り組みがなされている。<sup>(注7)</sup> また、越川は「学校スポーツの質」を求める動きを求める実践の状況を報告する中で、NRW州のあるギムナジウムを事例に学校とスポーツクラブの連携について競技スポーツの立場以外の部分に触れている。それによると、そのギムナジウムの校内スポーツクラブは、さまざまなスタイルで生徒たちが取り組むことができる体制をとっている。<sup>(注8)</sup> その中で、バレーボールクラブは、地元クラブのメンバーが活動等をコーディネートし、世話をするしくみを採ることにより運営されている。こうした連携は、学校側からすれば生徒たちの学習環境を充実させるということや学校とクラブとの連携事業を対外的にアピールすることであり、学校の特色を出すというメリットがある。一方クラブ側は、メンバーの確保をメリットの一つとみている。

## Ⅲ 地域におけるスポーツクラブの実際

### 1. 比較的小規模な地域スポーツクラブ

#### (1) FC グルーネヴァルト1957e.V.

##### 1) クラブの概要

FC グルーネヴァルト1957e.V.は、1957年に創立されたベルリンの小学校を主な活動場所とするサッカー単体のクラブである。クラブの組織は、6名の役員（代表、副代表、会計、事務局長、青少年部局長、青少年部局会計）と20名のボランティアから構成されている。2005年の会員総数は482名で、このうち232名が青少年である。各年齢層とも地域リーグに参加（成人男性：5チーム、青少年：10チーム）しており、年齢カテゴリーA（16-18歳）からF（6-8歳）までは、ベルリンサッカー協会主催のリーグに参加している。クラ

ブの活動方針は、①地域に根ざしたファミリークラブ、②レクリエーションスポーツと競技スポーツの促進、③青少年の健全育成、④トップチームのレベル維持であり、長期目標として「老若男女を問わず1000人規模のクラブになること、また同時に、社会的意義のある恒常的なプロジェクト（例えば、青少年の余暇プログラム、学校および職業教育の促進・サポート、国内外のクラブとの恒常的なパートナーシップなど）が実施されるクラブになること」を掲げている。また、1986年以降、すべての年齢をカバーする青少年部局を整備するとともに、外国人の受け入れ、家族によるクラブ援助、審判の育成、遠征やイベントの運営を積極的に行っている。チームの成績は、64-65年シーズンにクライスリーガ（地域リーグC）での優勝（成人男性トップチーム）、1992年クライスリーガBに昇格（成人男性トップチーム）、1999年クライスリーガAに昇格（成人男性トップチーム）、1995年ランデスリーガ（州リーグ）に昇格（壮年チーム）、1996年ランデスリーガ昇格（7歳リーグ）など各年代を通して優秀な成績をおさめている。会費は、入会金10ユーロ（成人、青少年とも）、月会費10ユーロ（学生、休会者は8ユーロ）である。

## 2) 活動の様子

図1に示すとおり、各年代のチームごとに練習を行い、練習終了後は、小学校の倉庫に置いてある冷蔵庫からビールやジュースを出して語らう姿が見られた。



図1 小学校のグラウンドで活動するFCグリーネヴァルト1957e.V.

## (2) CFC ヘルタ06e.V. (ケーゲル部門)

ケーゲルは、ボウリングに良く似たゲームである。樋のような緩い曲線を持った形状のレーンにボール（直径16cm、重量3.5kg、色は自由）を投げ、その先にある10本のピンを倒し得点を競い合う。25球ずつ4レーン（100球）で投げ総得点を競う。上級者はアベレージが700点ぐらいである。ケーゲルは体力よりも正確さやレーン（木製）の特性をつかむ経験が重要であり、高齢者でも比較的親しみやすいスポーツである。もともとケーゲルは「飲み屋にあるゲーム」というイメージがあり、あまり良いイメージを持たれていないところがある。ベルリン市内ではクラブ対抗のリーグ戦が行われている。かつては6チームずつ2回行っていたが、現在は12チームで1回行っている。

### 1) ケーゲル部門の歴史と現状

CFC ヘルタ06e.V.は1906年に創設され、ケーゲル部門は1956年に新設された。現在のメンバーは男性の

み12名で年齢層は36歳から70歳、高齢化が進んでおり、後継者不足が深刻である。1988年から1993年の間には女性メンバーもいたが現在は上述の通りである。また、障害のあるメンバーは、かつて左腕の欠損者が一人だけである。月会費は22ユーロ（90%が施設の使用料で、他の種目のメンバーの月会費は6ユーロ）である。ちなみに一般個人のレーン使用料は8ユーロである。昨年まで所属していたリーグではスポンサーがついていた。（降格後スポンサーはついていない）

## 2) インタビュー調査より（メンバーで最も若いAさん）

Aさんは父の影響でケーゲルを始めた。ケーゲルの魅力は同じ投げ方（レーンの癖を読みながら）を再現するのが難しく、奥が深い。クラブとの関わりについては非常に強い帰属意識を持っている。彼にとってクラブはプレイの場所だけではなく、食事をしたり、お酒を飲んだり、政治の話などをする場であり、クラブは文字通り生活の一部である。シャルロテンブルク区にあるクラブの拠点では年1回の総会以外にも様々なイベントが行われている。ただ、最近では年1回の総会に参加するメンバーが減ってきており、500から600名いるメンバーの役1割（50人程度）しか参加しない場合がある（役員も積極的ではない）。

前述した通り、メンバーの高齢化が進んでいる。若者たちのスポーツに対する指向が多様化（サッカーなどの伝統的なスポーツからインラインスケートなどにシフトする傾向がある）していることに加え、ケーゲルがメディアに取り上げられることが少なく情報に触れる機会がほとんどない。前述したイメージの悪さ（飲み屋でやるゲーム）も重なり、子どもに人気がない。プロモーション活動は口コミが中心であり、幾度か新聞に広告掲載などをしたが、若年層の食いつきは良くなかった。クラブ数は、現在ベルリン市内で100から150クラブである。以前はドイツ全体で8000クラブ（80年代）、現在はおよそ3000クラブ程度まで減少している。また、ケーゲルをやる場所自体も減少してきている。かつては40レーン以上の規模の施設があったが、今の場所（26レーン）に移動して活動している。東西ドイツの統一前は国や行政から指導者に対する交通費などの支援が出ていたが、今は国や行政からの補助金はない。



図2 CFCヘルタ06e.V.（ケーゲル部門：Aさんへのインタビュー）

## 2. 障害者の地域スポーツクラブの実際

### (1) SGH ベルリン

ベルリン市州シャルロテンブルク地区の実科学校（ペーターウスティノフ実科学校）の体育館などを拠点にして活動する連合スポーツクラブ、ハンディキャップベルリン（Sportgemeinschaft Handicap Berlin:



以下 SGH ベルリン) は、多種目、多世代の障害者を主体とした、「総合型障害者地域スポーツクラブ」として運営されている (安井2008)。このクラブは、障害のあるものを主要なメンバーとしているが、運営理念は「障害のある人もない人も、ともにスポーツを楽しむ環境作りを行うこと」を指すとされており、車いすバスケットボールを中心に多くの健常者がともに活動に参加している。

一般に比較的規模が大きく伝統のあるドイツのスポーツクラブでは、活動の拠点となるクラブハウスなどを持っている場合が多いが、SGH ベルリンの場合、学校の体育館内にクラブ専用の部屋を持つとともに、地下や2階の倉庫に車いすバスケットボール用の多数の車いすを用意し、いつでも自由に利用できるようにしている。

### 1) SGH ベルリンの成立経緯

SGH ベルリンの登録者数は、男性255人、女性231人合計486人、27歳以上の登録者は73%を占めている (2007年現在)。クラブの活動は、1955年に設立された障害者のスポーツクラブ「シャルロテンブルク身体障害者スポーツクラブ (VSC)」として始まった。1989年にはシャルロテンブルク障害者スポーツクラブ (CSB) に名前を変更、同時に主に高齢者の運動クラブ「フィットライン (fitLine)」と提携関係を結び、水泳や水を使ったリハビリテーションなどが行われるようになった。その後大学クラブ連合の車いすバスケットボールチームとの連携 (FU)、1996年からは、子どもを対象にしたインテグレーションスポーツなども行われるようになった。2004年には、クラブ発足50年を迎えたヴィルメルスドルフ障害者スポーツクラブ (BSW) を統合するなど、様々なクラブとの提携、統合を経て現在の規模に発展してきている (図3)。ただしこのような統合に際しては、例えば知的障害者のサッカークラブなどでは、ベースとなるチームに、別のチームのメンバーが合流する形となり、メンバー間の人間関係を作るのにかなりの時間とスタッフの配慮が必要となったとのことであった。しかし規模拡大に伴い、予算や人的支援など様々なスケールメリットも生じているようである (安井2008)。

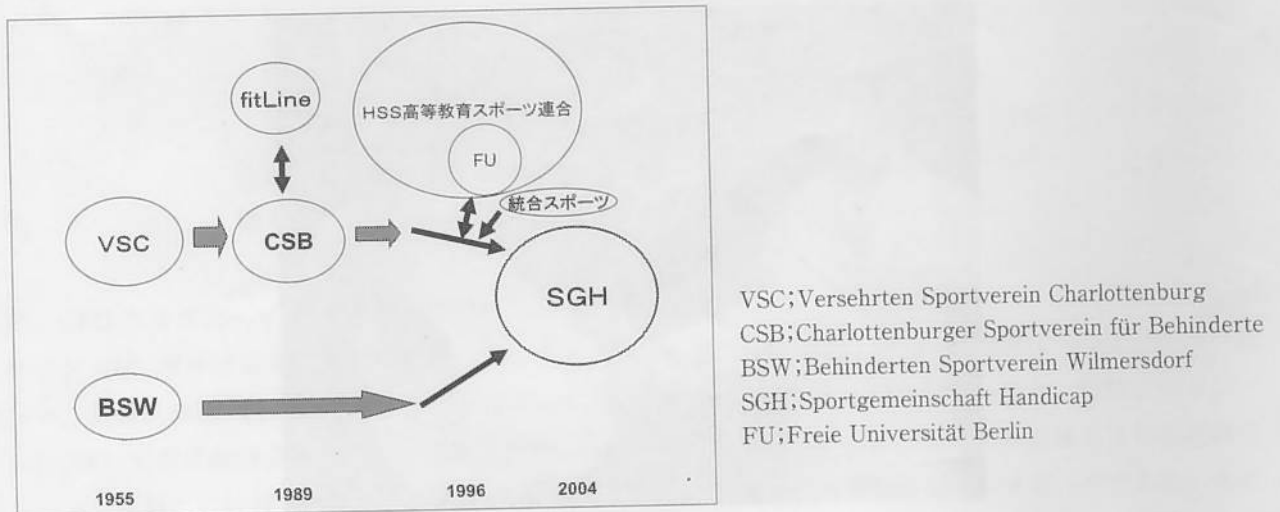


図3 SGHベルリンの発展経緯

### 2) SGH ベルリンの活動内容

表1は、SGH ベルリンの活動内容と日程表を示したものである。ペーターウスティノフ実科学校体育館を拠点とした活動の他、ベルリン市内各地の学校やグラウンドを利用して様々な活動が展開されているのがわかる。また表2は区分ごとのクラブメンバーの会費を示したものである。正会員は1ヶ月13ユーロ (18歳未

満8ユーロ), となっており, 18歳以下の青少年, 障害保険受給者などは証明書の提示により割引料金が適用される。また会の運営には, 各種目それぞれのベルリン障害者スポーツ連盟が主催する指導者資格を取得したスタッフのほか, 障害者スポーツ指導員の資格を取得した大学生などのボランティアスタッフがあたっている。

表1 SGHベルリンの活動内容と日程

時間	活動内容・グループ	活動場所
月曜		
17.00-19.00	子どもの統合スポーツ	ペーターウスティノフ実科学校体育館
18.00-20.00	フットベースボール (知的障害)	ステータグリュツ運動場
火曜		
16.30-18.00	卓球 (肢体不自由)	ペーターウスティノフ実科学校体育館
18.00-19.30	ボッセルン (知的障害)	ペーターウスティノフ実科学校体育館
16.15-17.30	リハビリ運動グループ1 (高齢者)	ペーターウスティノフ実科学校体育館
17.45-19.00	リハビリ運動グループ2	ペーターウスティノフ実科学校体育館
19.15-20.30	リハビリ運動グループ3	ペーターウスティノフ実科学校体育館
19.00-21.00	水泳 (高齢者)	プール (ヴィルメルスドルフ)
20.00-21.30	フットボールテニス	ミュレナウ基礎学校
水曜		
16.00-17.30	パーキンソン病者のためのスポーツ	グリュネバルト基礎学校
16.30-18.30	サッカー (知的障害)	ペーターウスティノフ実科学校体育館
17.00-19.30	ファンスポーツ (知的障害)	クルツシュヴィッター上級学校
18.30-21.30	車いすバスケットボール	ペーターウスティノフ実科学校体育館
木曜		
16.00-17.15	リハビリ運動グループ4	ペーターウスティノフ実科学校体育館
17.15-18.30	リハビリ運動グループ5	ペーターウスティノフ実科学校体育館
17.00-19.00	ユニホッケー (知的障害)	トレトウ基礎学校
19.00-20.30	サッカー (知的障害)	バンコウ運動場
20.00-21.30	車いすバスケットボール	ペーターウスティノフ実科学校体育館
金曜		
16.00-17.15	子どもの車いすスポーツ	ペーターウスティノフ実科学校体育館
17.15-18.30	車いすバスケットボール	ペーターウスティノフ実科学校体育館
16.00-17.30	遊び・ファンスポーツ (知的障害児)	カタリーナハインロート基礎学校
17.30-19.00	遊び・ファンスポーツ (知的障害者)	カタリーナハインロート基礎学校
19.00-20.00	体操 (統合)	カタリーナハインロート基礎学校
20.00-21.30	ボール遊び (統合)	カタリーナハインロート基礎学校
18.00-	フットボールテニス (知的障害)	トレトウ基礎学校

表2 メンバーの会費 (月額)

区 分	会 費
18歳以上	13,00€
青少年 (18歳未満)	8,00€
26歳以下の指導スタッフ	8,00€
障害雇用者・障害保険受給者	6,00€
スポーツには参加しない会員	5,00€
家族会員	半額

## 3) 日常の活動の様子 (車いすバスケットボール)

コーチを始めクラブのスタッフは、月一回土曜日に2時間程度のスタッフミーティングを行い、クラブの運営に関する話し合いを行うほか、練習やイベント後、折に触れて集まりを持ちながら、その都度様々な課題を話し合っている。その内容は、選手の運営に対する不満や要求、選手同士の相性や態度、イベント参加メンバーの手順などの打ち合わせ多岐にわたる。このような話し合いを通してクラブ組織の民主的な運営が行われるよう工夫している様子が伺われた。

またコーチのシュミット氏は、もともとバスケットボールをやっていたが、1990年から車いすバスケットボールを始め、障害者スポーツ連盟の主催する講習会に参加してコーチ資格を取得、有給でクラブの運営にあたっている。ただし教会のスタッフや介護用品の販売などを本業にしており、コーチはある意味の副業として位置づけられている。

チームに登録されているメンバーは23名で、そのうち6名は女性である。また下肢に障害のあるメンバーは12名で、半数が健常者である。なおそれぞれの体調や長期休暇などの関係から、常時練習に参加しているのは15名前後である。

表3は、車いすバスケットボールの練習の様子を記録したものである。18:00ごろコーチのシュミット氏が、体育館の隅でボール、用具などの準備を始め、18:30練習開始の時間になると、徐々に選手達が集まってきた。その後更衣室や体育館の隅で更衣を済ませ、持参したバスケットボール用車いすの調整やランニングシュートなどの練習が始まった。18:45、コーチが各選手の個別の課題などについてアドバイスなどを行い(図4)、19:00ランニングシュート、パス練習、グループ(3名)による練習などが開始された。19:45、5名ずつの試合形式での練習が始まった(図5)。途中10分程度での、メンバー交替を続けながら練習が継続されたが、コートに出ていないものは、練習の見学の他、休憩、各自の課題、シュート練習などを行っていた。21:20ごろ練習終了となり、更衣、用具の片づけなどを行ったあと解散となったが、慰労・懇親会に参加するものは体育館ロビーに集まり、店を決めて移動となった。

練習後は、近くのレストランで簡単な食事を摂りビールなどを飲みながら交流を深めるのが通例である。バリアフリー化された交通網が発達し、24時間地下鉄が運行しているベルリンでは、車いす利用者も遅くまでクラブ活動に参加したあと飲食しても、帰宅の心配をする必要はない。また場合によっては、家族が運転する自家用車に乗り合わせて送迎する姿も見受けられた。

表3 車いすバスケットボールの練習の様子(2005年4月29日記録)

18:00	コーチのシュミット氏が、体育館の隅でボール、用具などの準備を始める。
18:30	練習開始時間 徐々に選手達が集まってくる。更衣室や体育館の隅で更衣を済ませ、持参したバスケットボール用車いすの調整やランニングシュートなどの練習を始める
18:45	コーチが個別の課題についてアドバイスなどを行う。
19:00	練習開始、ランニングシュート、パス練習、グループ(3名)による練習など
19:45	5名ずつの試合形式の練習、残ったものは各自の課題、シュート練習などを行う 10分程度での、メンバー交替を続けながら練習を継続する
21:20	練習終了 更衣、用具の片づけなどを行い解散
21:50	練習後の慰労・懇親会に参加するものは体育館ロビーに集まり、店を決めて移動



図4 コーチによる個別の指導



図5 ゲーム形式の練習

#### 4) 年間行事・イベント・大会

表4は、SGHベルリン車いすバスケットボールクラブの年間の主な活動を記録したものである。年間を通して、様々な大会に参加しているほか、講習会、地域の学校での車いすバスケットボールの紹介や指導(安井2005)、ショッピングセンター主催のイベントに参加して、ストリートバスケットボールのデモンストレーションなど、教育・啓蒙活動なども行っていた。さらにメンバーが集まった夏の懇親会なども行われ、日常的な交流と多様なイベントにより、スポーツだけではなく余暇活動の場として位置づけられていることがわかる。このように、スポーツクラブは、参加者が単にスポーツを楽しむという場だけではなく、地域とのつながりのなかで、多様な活動に参加することで、地域のスポーツ文化の形成に寄与している様子が伺われた。

表4 車いすバスケットボールクラブの年間の大会・イベント参加例(2007年)

3月	KOOP-CUP車いすスポーツの国際トーナメントのベルリン大会をSGHで実施
4月	マックスシュメーリング体育館でのエキジビション参加
6月	ケーベニックのショッピングセンターでのイベント参加(デモンストレーション) ベルリン工科大学でのイベント科学技術の夕べ:車いすバスケットボールデモンストレーション スポーツフェスティバル参加 スコア・記録の実践講習会の実施
7月	子どもの車いすバスケットボール体験イベント(トライアウト)実施
8月	国際パラリンピックイベント参加
9月	車いすバスケットボール大会
12月	子ども・ユースの車いすバスケットボール大会 クリスマスイベント 理学療法士の車いすスポーツワークショップ参加

#### (2) アルバベルリン

##### 1) クラブの概要

ベルリンに本拠を持つプロチームを擁するバスケットボールクラブ、アルバベルリン(Alba Berlin)では、ドイツリーグに所属するプロチームとともに、複数の車いすバスケットボールチームも運営されている。アルバベルリンは、1989年に設立されたバスケットボールクラブで、1996年にベルリン市北東部に建設された、巨大なイベント施設マックスシュメーリング体育館を拠点に活動を行っている。車いすバスケットボー

ルのチームは2002年に設立され、各リーグに所属する複数のチームの他、女性のチーム、子どものチームなどが所属している。車いすバスケットボールクラブのプロ化の動きもある中、比較的競技性の高いチームといえる。またパラリンピックの代表選手なども所属している。

## 2) 練習の様子

表5は、ベルリン北部のリリーヘノッホ体育館(Lilli-Henoch-Halle;図6)で行われた練習の様子である。夕方から子どもの車いすバスケットボールが始まり、続けて大人のクラブが始まるが、子どものクラブのボランティアコーチとして参加していたメンバーが、そのまま成人チームのメンバーとして参加するとともに、子どものメンバーは、練習終了後、大人の練習も目にするこゝで、将来の目標や技術的な向上にも繋がっている様子がみられた。

子ども/青年チームの登録メンバーは、6歳から21歳までの16名で、当日はそのうち特殊学校などに通っている肢体不自由者9名が参加していた(図7)。なお男性5名は、女性4名で、片まひのものが1名であった。指導者は、車いすバスケットボール部門の専属コーチ、クラウゼ(Krause)氏とアンナ(Anna)氏(学生コーチ)である。17:30ごろ、練習会場の体育館に子どものメンバーが集まり、用具などの準備(車いすの組み立て)などを行った後、18:00ごろウォームアップとして軽快な音楽に合わせランニングが始まった。18:20 遊び形式のボールのパスを行った後、18:30ストレッチとともにコーチにより練習内容の説明が行われた(図8)。練習は年少者と年長者に別れて行われ年少者はパスの練習、年長者はシュート、ランニングなどを行った。また、通常のゴールの他に、頸椎損傷者などのゲームで使われる低いゴールを使ったツインバスケット形式の練習も行われた。19:00ごろ、ゲーム形式の練習が行われたが、そのころになると、後半の大人のチームメンバーが徐々に集合してきて、空いている空間を使って各自ウォームアップが開始された。

表5 アルバベルリン車いすバスケットボールクラブの練習の様子(子ども/青年チーム2005年5月6日記録)

17:30	体育館に子どものメンバーが集まってくる。用具などの準備(車いすの組み立て)を始める。
18:00	ウォームアップ開始、軽快な音楽に合わせランニング
18:20	遊び形式のボールのパス
18:30	ストレッチとともにコーチが練習内容の説明 年少者:パスの練習、年長者:シュート、ランニングの2グループに分かれて練習開始 ツインバスケット(腕力などによって高いゴールと低いゴールを使うもの)
19:00	ゲーム形式の練習 大人のチームメンバーが徐々に集合、各自ウォームアップを開始
19:30	大人の練習開始
19:45	合同で三角パス、連続ランニングシュート
20:30	男子チーム:クロスパス、セット・ブロック、ランニング、往復ダッシュ、ランニングシュート、 対面パス 女子チーム:ゲーム形式の練習開始:コーチはゲームの合間に各選手に動き、 位置取りなどの細かいアドバイスを行う
21:00	練習終了

19:30大人の練習開始。大人のチームには、3名の健常者と1名の片まひ者を交えて18名が参加し、そのうちの男性は8名、女性は10名であった(図9)。子どものチームのコーチとして参加していたアンナ氏は、そのまま女子チームのメンバーとして練習に参加した。19:45合同で三角パス、連続ランニングシュート、20:30男子チームは、クロスパス、セット・ブロック、ランニング、往復ダッシュ、ランニングシュート、対面

パス、女子チームは、ゲーム形式の練習開始が行われた。その間コーチはゲームの合間に各選手に動き、位置取りなどの細かいアドバイスを行っていた。21:00には、練習が終了し解散となった。

全体として練習中は軽快な音楽を流しながら、楽しい雰囲気の中で練習に取り組めるような工夫が行われていたが、競技性重視の大人の練習では、コーチの厳しい指摘と注意が飛び交い、緊迫した雰囲気の練習が展開されていた。



図6 練習会場のリリーヘノッホ体育館



図7 子ども/青年チームのメンバーとコーチ (右)



図8 準備運動 (ストレッチ)



図9 大人のチームの練習風景

#### IV まとめ

本調査では、ドイツにおける比較的小規模な地域スポーツクラブの活動ならびに障害のある人々の地域スポーツクラブにおける活動の実態を記述するために、ベルリン市州の4つのクラブを訪問しインタビュー調査を行った。

FC グルーネヴァルト1957e.V.は、サッカー単体の小規模クラブであり、活動場所が限られている(小学校のグラウンドを利用、クラブハウスがない)という環境でありながら、多世代にまたがるメンバーが交流をしながら活動を行っていた。練習終了後も異なる世代のメンバーが語り合う姿が見られ、単にスポーツを行う場としてだけでなく、多世代にわたる地域の人々が交流する場として機能していることが伺えた。一方、CFC ヘルタ06e.V.のケーゲル部門は、種目の特性による部分もあるが、若い会員の獲得が課題となっていた。また、ケーゲル部門だけではなく、クラブ全体で行われるイベントなどの活動における参加者も減少傾向にあり、世代や種目を越えた交流は以前より減少している状況であった。一方SGH ベルリン、アルバベ

ルリン (Alba Berlin) では、障害の有無に関わらず、クラブの運営やイベントに多世代が関わりを持ちながら活動を行っていた。ベルリン市州では、障害のある人々のスポーツ参加率が上昇していることが報告されており、その背景として、このような障害の有無にかかわらず活動に参加するような「統合された総合型スポーツクラブ」の増加などの要因のあることが指摘されている (BSB, 2002, DOSB, 2007, 86-87, 安井, 2008)。

今回調査を行ったクラブは、それぞれ課題を持ちながらも地域におけるスポーツ生活を支える場として十分に機能していた印象を受ける。今後は、大都市ではない (比較的人口規模の小さい) 地域の実態や、移民など社会的に弱い立場の人たちのスポーツ活動の実態をより詳細に調査し、ドイツのスポーツ環境をより立体的に描きながら、今後のわが国のスポーツ環境改善のための資料として整理することが求められる。

## 注

注1) ドイツのスポーツクラブは、「スポーツ活動や社交を目的として、自由意志によって構成された社会的組織」(Anders, G. 1992, 467) と定義され、クラブ法に基づき、非営利的な活動、会員7名以上などの一定の条件を満たせば法人としての資格が与えられ、公的な資金援助が受けられる。

注2) スポーツクラブの50%は、子どもの会費が月3ユーロ以下、青少年では3.6ユーロ以下、成人では6.5ユーロ以下である。また、スポーツクラブの61%は家族会員に特別な料金設定をしている。その中のスポーツクラブの50%は、家族会員の月会費を12ユーロ以下としている。(Breuer, C., Haase, A. 2007, 316) これにより提供されるスポーツ活動に対する経済的な障害は避けられる (Breuer, C., 2007, 15)。ベルリン市州をみると、スポーツクラブの50%が、子どもは月5ユーロ、青少年が7ユーロ、成人が10ユーロであり、家族会員制の適用が40%のスポーツクラブにおいてあり、その50%が30ユーロである。また、ベルリン市州のスポーツクラブ全体の平均は、子どもが月9.71ユーロ、青少年が月12.86ユーロ、成人が月22.61ユーロ、家族会員が61.61ユーロである。

注3) NRW州のミュンスター市におけるボートクラブでは、近年若者のクラブ離れが問題となっているようである。その背景には、サービスを基本とするフィットネスクラブの台頭や消費主義的な若者の価値観やライフスタイルにともない、クラブにおける慣習的な活動の煩わしさがあるという。例えば、ボートクラブでは、ボートのメンテナンス、クラブハウスの補修、あるいはビジターへの対応などすべてクラブ員が行わなければならない。一方でフィットネスクラブなどの商業スポーツ施設では、会員は連帯的で相互扶助的な活動をする必要はなく、健康運動やスポーツを楽しむことができる。こうした活動の違いがクラブを敬遠する傾向につながっているという。この実情は、越川の2006年11月のドイツにおける調査研究の一環として行ったインタビューに基づいている。

注4) 類似した見解をGrupe, O. (2000) と藤井 (2003c) は示している。また、藤井 (2004) は、近年ドイツのスポーツクラブは人々の多様化するスポーツへの期待や要求を背景にクラブが大規模になったり、あるいは小規模化するという傾向を増し、分極化しているありようをその出現背景とともに明らかにしている。

注5) 青少年のスポーツ活動を提供する団体を束ねる組織は、ドイツスポーツユースゲント (Deutsche Sportjugend) である。(Becker, H., 1992, 111) この組織はドイツオリンピックスポーツ連盟の傘下にあり、ドイツスポーツユースゲントが統括する組織のタイプは、各競技団体のユース組織、州のスポーツユースゲント、そしてそれ以外の特別な課題 (例えば障害者スポーツ、合気道) をもった青少年組織の3つにわかれている。

注6) スポーツクラブには、「自分らしさ」を築いていくことと同輩集団における社会的な安定性や認識をスポーツ活動によって可能にしていく人格形成機能、スポーツを通して身体だけではなく心の健康に寄与する健康教育機能、社会的なふれあいや活動をともにする機会を提供し充実したレジャー生活を営むことを学ぶ機能、そして民主的な行動様式や市民としての責任を学ぶ機能が求められている。(Cachay, K., 2001, 14)

注7) これについては、藤井 (2003a) がNRW州の取り組みを事例に明らかにしている。また、越川 (2008) によって、訪問したミュンスター市のギムナジウムも、トレーニング計画を弾力的に時間割に統合したり、スポーツ寮を設けたりして、競技スポーツに従事する生徒たちへのサポート体制の強化に努めていたことが報告されている。

注8) 具体的には、体力や運動能力の向上を目的とする促進グループやフィットネスグループ、生徒同士の交流を目的とする集団、あるいは才能発掘や才能促進を目的とする集団としてクラブが組織され活動が行われている。(越川, 2008)

## 付 記

調査資料の収集にあたっては、科学研究費補助金、「障害児者の余暇・自立支援に関する地域システムの構築：ドイツの教育・福祉から」（基盤研究B，課題番号20402042）の補助を受けた。

## 文 献

- Anders, G. (1992) Sportverein. In: Röthig, P. (Hrsg.) Sportwissenschaftliches Lexikon. Hofmann: Schorndorf.
- Baur, J. (1991) Nachwuchsarbeit in Sportvereinen: Modernitätsorientierte Verbandsprogrammatik für eine traditionsorientierte Vereinspraxis. Sportwissenschaft, 21:247-266.
- Becker, H. (1992) Deutscher Sportjugend. In: Röthig, P. (Hrsg.) Sportwissenschaftliches Lexikon. Hofmann: Schorndorf.
- Breuer, C. (2007) Sportentwicklungsbericht2005/2006 Analyse zur Situation der Sportvereine in Deutschland. Sportverlag: Köln.
- BSB (Behinderten Sportverband Berlin) (2002) Behindertensport in Berlin1952-2002 50Jahre BSB, Behinderten-Sportverband Berlin e.V.
- Cachay, K., Thiel, A., Olderdissen, H. (2001) Jugendsport als Dienstleistung Eine Fallstudie zur Jugendsportschulen. Hofmann: Schorndorf.
- Diegel, H. (2004) Entwurf einer visionären Sportpolitik. sportunterricht, 53: 3-10.
- DOSB (Deutscher Olympischer Sportbund) (2007) Jahrbuch des Sports2007-2008, Schors, pp.86-87
- 藤井雅人 (2003a) ドイツにおける学校とシュポルトフェラインの連携 -Northrhein-Westfalen州におけるタレント発掘およびタレント育成のための州連携プログラムの展開-. スポーツ教育学研究, 23(1) : 17-40.
- 藤井雅人 (2003b) 青少年と「クラブスポーツ」-「教育学的な」スポーツ提供への期待. 明石書店: 東京, pp.206-208.
- 藤井雅人 (2003c) スポーツクラブ -みんなのスポーツ. 田村光彩他編, 現代ドイツの社会・文化を知るための48章. 明石書店: 東京, pp.202-205.
- 藤井雅人, 乾真寛 (2004) 変動期にあるドイツのフェラインスポーツ -フェライン規模の分極化とその出現背景-. 福岡大学スポーツ科学研究, 35(1) : 11-30.
- Grupe, O., Krüger, M. (1999) Einführung in die Sportpädagogik. Hofmann: Schorndorf. <永島 惇正, 岡出美則, 市場俊之, 有賀郁敏, 越川茂樹共訳 (2000) スポーツと教育 ドイツ・スポーツ教育学への誘い. ベースボールマガジン社: 東京.>
- Grupe, O. (2000) Vom Sinn des Sports Kulturelle, pädagogische und ethische Aspekte. Hofmann: Schorndorf. <永島惇正, 岡出美則, 市場俊之, 瀧澤文雄, 有賀郁敏, 越川茂樹共訳 (2004) スポーツと人間 [文化的・教育的・倫理的側面] 世界思想社: 京都.>
- Heinemann, K., Schubert, M. (1999) Sports Clubs in Germany. In: Heinemann, K. (Ed.) Sport Clubs in Various European Countries. Hofmann: Schorndorf.
- 川西正志 (2006) 生涯スポーツ実践論 (改訂2版), 市村出版: 東京, pp.11-12, pp.199-211
- 越川茂樹 (2008) ドイツにおける「学校スポーツの質」を求める動きが反映する実践の状況. 岡山体育学研究第15号, 27-40.
- 佐藤由夫 (2006) ドイツのスポーツクラブの実践例, ドイツの生涯スポーツ実践論 (改訂2版), 市村出版: 東京, pp.211-215
- Ständige Konferenz der Kultusminister der Länder, Deutscher Sportbund und Kommunale Spitzenverbände (1985) Zweites Aktionsprogramm für den Schulsport. 1-25.
- 安井友康 (2008) ドイツ・ベルリン市州における障害者の地域スポーツ活動, 障害者スポーツ科学, 6(1), pp.40-50
- 安井友康 (2005) 車いすスポーツ実践を通じた障害理解—ドイツ・ベルリン市における車いすバスケットボールの実践事例から—, 障害者体力科学研究所紀要4(2), pp.13-18

(山本理人 北海道教育大学岩見沢校准教授)

(安井友康 北海道教育大学岩見沢校教授)

(越川茂樹 岡山県立大学准教授)